この記事は SAPinsider から許可を得て掲載しています。Copyright © 2020 WIS Publishing. All rights reserved.

シンプルさとビジネスバリューの交差点

SAP S/4HANA® への移行を自動化する

SAPinsider 編集主任 **Brianna Shipley**

今日のビジネス環境では、変革を加速させるという名目のもとにスピードと効率性が重要視されています。そのような中にあって、IT 部門と基幹業務部門には、新しいテクノロジーとプロセスを迅速に導入しなければならないという重圧、複雑な IT 環境を継続的に改善しなければならないという重圧、そしてシームレスに共同作業ができる体制を築かなくてはならないという重圧がのしかかっています。このような重圧は大抵、時代の先を進みながら俊敏性を維持し、インテリジェントな組織になるために IT インフラストラクチャをモダナイズしなければならなくなった時に出てきますが、これらの目標は SAP S/4HANA® で実現できます。これらの目標を達成しなければならないということに加えて、SAP ERP Central Component (SAP ECC) ベースのシステム (SAP Business Suite など) のメインストリームサポートが 2027 年 (延長サポートは 2030 年) に終了することになり、SAP を利用する組織は SAP S/4HANA® への移行をますます迫られています。

SAP は幅広い業種の組織で利用されていますが、Red Hat Ansible チームによると、SAP S/4HANA® への移行を進めている組織の目標には共通するものがあり、それには投資対効果 (ROI) と最適化の向上、人的エラーの削減と可監査性の向上による一貫性の実現、修正を迅速化することによる市場投入期間の短縮などが含まれます。SAPinsider が最近実施したアンケートでは、調査対象の SAP ユーザー企業のうち少なくとも 37% が、SAP S/4HANA® への移行手順 (テストやデータ移行など) を自動化しつつあると回答しました。

SAP S/4HANA® への移行プロジェクトに自動化を取り入れると考えたとき、自動化の概念に関して多くの疑問が残ります。複数のチームや部署が共有しているプロセスを、これ以上複雑にすることことなく自動化することはできるでしょうか？Red Hat のプリンシパルプロダクトマーケティングマネージャー (ポートフォリオアーキテクチャ) である Marcos Entenza (マルコス・エンテンザ) は次のように述べていま

この記事は Red Hat によって翻訳されたものです。WIS Publishing はいかなる場合においても、この記事の内容および翻訳に関連する間違いについて責任を負いません。

「自動化によって
業務が単純化
されるため、
運用担当者は
価値の高いタスクに
より多くの時間を
使えるように
なります。」

— Red Hat コンサルティング
プロダクトマネージャー
(Ansible)
Massimo Ferrari

す。「SAP などのエンタープライズ・アプリケーションの維持管理には通常さまざまな領域を担当する複数のチームがかかわるため、かかわる人が多ければ多いほどシンプルであることが重要になります」。どうすれば自動化によるメリットを最大限に活用できるでしょうか?日々行っていたタスクが自動化されて空いた時間はどう使えばよいのでしょうか?この記事では、SAP S/4HANA® に移行中または移行を計画している SAP ユーザー企業が抱いているこれらの疑問に答えていきます。

組織のペースに合わせて自動化を実装する

Red Hat のコンサルティングプロダクトマネージャー (Ansible) である Massimo Ferrari (マッシモ・フェラーリ) によると、多くの組織は自動化の実装を「0 か 1 か」で捉えています。SAP をはじめとするエンタープライズ・アプリケーションは複雑に重層化していることが多いため、このようなアプローチではすぐに手に負えなくなります。「基盤となるインフラコンポーネントの上に、オペレーティングシステムと実際のアプリケーションの層があり、それに加えてパブリッククラウドなど境界で実行されるコンポーネントまでかかわってきます」と Ferrari は言います。そのため、IT スタック全体でさまざまな組織階層から責任の異なる多様なチームがサポートに携わっています。このような状況にある組織では、自動化は IT スタックのレイヤーごとや担当チームごとにサイロ化されて導入されがちです。しかし、自動化は必ずしも全体で一挙に導入する必要はありません。統合的な戦略のもとに時間をかけつつ段階的に進め、サイロを打ち壊していくことも可能です。

Red Hat の Ansible Automation Platform を使うとそのような段階的アプローチで自動化に取り組み、IT 部門のチーム間でコラボレーションすることも可能になります。Ansible Automation Platform は、エージェントレスなモジュール式のアーキテクチャを採用して自動化の導入を単純化しています。アーキテクチャーには、Red Hat Ansible Tower (IT 自動化プロセスの一元化と制御)、Automation Hub (「モジュール」と呼ばれる、パッケージ化されて Content Collections で公開されている Ansible 認定インテグレーションのリポジトリ)、Automation Services Catalog (ビジネスユーザーによる自動化アセットへのアクセスを単純化)、Automation Analytics (ビジュアルダッシュボード、健全性に関する通知、Ansible を使用する各チームの情報を含む組織全体の統計情報を提供) などのコンポーネントが含まれます。これらのコンポーネントによって、組織のビジネスプロセス、成熟度、目標に準じて自動化を導入し、活用していくことができるようになります。この方法であれば、SAP を利用する組織は成果が出やすい単純なタスクから自動化し、スキルや知識の向上に合わせてより高度なタスクの自動化へと進めていくことができます。

Red Hat Ansible Automation Platform によって単純化できるのは SAP S/4HANA® への移行プロセスだけではありません。移行後の環境も単純化できます。Ansible Automation Platform では、SAP のインテリジェント・アプリケーション (特にデータインテリジェンス関連) を実装することも、SAP の技術強化に環境を適応させることもできます。技術強化を図る (たとえばビジネスプロセスの調整など) ためには、従業員は日常的な作業から離れて、代わりに創造的に考え、コミュニケーションを取ることが求められます。したがって、自動化を進めれば運用担当者が不要になるという誤解は正す必要があります。

価値を生み出すための時間を増やす

自動化の目的は、予測可能な繰り返しタスクを自動的に処理できるようにすることです。たとえば、希望どおりの構成を適用することや、企業ポリシーに準拠した基準を維持すること、運用の維持管理などがこれにあたります。しかし、自動化の真の価値は、そうしたタスクを自動処理すること自体ではなく、その結果生み出された時間を自動処理システムにはできないこと、つまり考える時間に充てられることです。「自動化によって業務が単純化されるため、運用担当者は価値の高いタスクにより多くの時間を使えるようになります」と Ferrari は言います。プロセスを最適化する業務などに注力できるよう従業員の時間を解放したいという要望は SAPinsider が最近実施したアンケートにも表れており、回答企業の 42% が、プロセスの自動化を導入する主な理由として、従業員が高い価値を生み出す業務に従事できる時間が足りないことを挙げています。

Ferrari は、「人間のタスクを自動処理で置き換える」という誤解を正すための活動として、自動化を導入した組織の体験談を伝えています。そうした組織の多くで自動化は、同じ時間でより多くの仕事をこなそうという従業員のやる気を起こさせる手段として機能しているのです。また、自動化を IT 専門家は成長のチャンスとしてとらえ、企業はかつてないほどに大きく複雑なビジネス案件を創出する機会としてとらえています。たとえば、SAP S/4HANA® への移行のデプロイ段階で Ansible Automation Platform を使用すれば、プロセスの信頼性が高まることに加えて、新しい環境を実装するための運用担当者のタスク（ホストを準備する際に公開済みのすべての SAP Notes を適用して認定済みのデプロイメントを実行できるようにするなど）を迅速化できます。「このようなタスクの実行には非常に長い時間が必要ですが、Red Hat は System Roles for SAP というソリューションを提供して、自動化の開発とお客様のサポートを行っています」と Entenza は話します。これらのタスクを自動化して信頼できるプロセスを構築すれば、運用担当者は価値の高いタスクに取り組んだり、環境をさらに改善できる方法を考えたりできます。これがビジネスの拡大につながっていくのです。

SAP S/4HANA® への移行プロジェクトでデプロイの次に来るフェーズでは、新しい環境が確実に機能するように組織の各プロセスを最適化する期間が設けられます。「この運用フェーズで実行するタスクはどれも難しくはありませんが、時間がかかるものばかりです。そのため、これらは自動化の対象とするのに最適です」と Entenza は言います。これらのタスクが自動化されれば、スタッフはプロセスや IT 環境を改善するためのイノベーション、ブレインストーミング、戦略作りにより多くの時間を使えるようになります。

「適切なツールセットを適切なタイミングで導入することは常に重要ですが、IT 部門が複数の稼働部分を扱わなければならない状況においては、これは必須の条件となります。」

— Red Hat プリンシパルプロダクトマーケティングマネージャー（ポートフォリオアーキテクチャ）
Marcos Entenza

Red Hat Ansible チームは顧客を対象にフォーカスグループを実施し、そこで得たフィードバックから、SAP S/4HANA® への移行でサポートを必要するのは IT チームだけではなく、基幹業務部門のチームにも時間、リソース、および雇用できる専門的人材が不足していて、それが移行後の変化に適応できるかどうかの課題となりうることがわかりました。SAP S/4HANA® への移行プロジェクトのような取り組みを完了まで導くためには、業務領域の壁を越えてコミュニケーションが取れる体制を作ることと、コラボレーションを促進する文化を導入して部門サイロを打破することが不可欠です。基幹業務部門と IT 運用チームは、SAP S/4HANA® がビジネスプロセスに与える影響とプロセスの改善方法に関して足並みを揃えながら、共同で作業を行います。移行中に組織が必要とするのは技術的なサポートだけではなく、組織文化を刷新するためのサポートも必要となります。

コラボレーションを促進する文化を支援する

Ferrari の経験上、多くの組織が連携をとらずに各所ばらばらに自動化を進めようとしています。「SAP S/4HANA® への移行を図る SAP ユーザー企業には、複数のチームがそれぞれ独自の目標を立てて個別に自動化を導入したり、共通のプロセスどころかコラボレーションするための土台すら存在しなかったりすることがあります」と Ferrari は語ります。

SAPinsider のアンケート調査結果から、このような複数チーム間における連携の欠如を解決するためのプロセス自動化戦略として、部署の壁を越えて SAP アプリケーションと SAP 以外のアプリケーションの両方の自動化を統合すること (回答組織の 58% で実施) と、移行の一環としてプロセスのリエンジニアリングと標準化を行うこと (回答組織の 41% で実施) が最も多く行われていることがわかりました。Ansible の Playbook で使用される YAML は人間が読める形式で記述できます。自動化ジョブを自然言語に近い形で表現できるため、これらの戦略が採用されやすくなります。「YAML を共通の土台にすれば、IT 部門内のチーム間で自動化を共有できます」と Ferrari は話します。

Red Hat Ansible Automation Platform では、複数のユーザーグループが参加でき、多数のエントリポイントを設けることが可能なため、コラボレーションが容易になり、プロセスの実装方法や実行方法の認知度も高まるため、コミュニケーションがさらに単純化されます。その結果、企業は統一のとれた方法で自動化を行い、自社のポリシーに準拠したコンテンツを独自のペースで作成および共有することができます。また、情報が豊富なオープンソース・コミュニティへのアクセスも可能になります。

SAP S/4HANA® への移行に取り組んでいる SAP ユーザー企業は、単に新しいテクノロジーに移行しているだけではありません。実はそれと同時に、新しいデプロイメントモデルにも移行しています。事実、SAPinsider のアンケートでは、回答企業の大多数 (71%) が何らかの形のクラウド・インフラストラクチャに SAP S/4HANA® をデプロイする計画があると回答しています。これはつまり、クラウド・インフラストラクチャでオンプレミスバージョンの SAP S/4HANA® を使用している企業もオンプレミスの手法から離れ始めていることを示しています。Ansible は、自動化による移行プロセスの迅速化や、コストと複雑さの低減、市場投入時間の短縮を図る上記のような企業を支援するだけでなく、コラボレーション中心の文化への移行を支援し、組織が簡単に自動化を導入できるように最初の壁を最小限に抑えます。「たとえば、SAP を利用している組織が Ansible を使うと、IT 運用チームとアプリケーションチームが連携して、より効率的に移行とサポートを行えるようになります」と Entenza は話します。

自動化で SAP S/4HANA® への移行を加速

SAP を利用している組織は、SAP S/4HANA® への移行の必要に迫られています。その背景には 2027 年に予定されている SAP ECC のメインストリームサポートの終了がありますが、SAP S/4HANA® の導入がインテリジェントなエンタープライズへの道を開く助けとなることも理由に挙げられます。今日のビジネス情勢においては、インテリジェンスなしに戦うことはできません。SAP S/4HANA® への移行とそれに伴う変化に適応するという点においては、IT チームだけでなく基幹業務部門も、適切なスキルセットを合わせ持つ人材を確保するのに必要なリソースと時間が足りないという問題に悩まされます。この問題を解決する方法の一つが、自動化を使って移行を単純化することです。SAPinsider のアンケートでは、特に多くの組織が選んだ自動化の対象の中に SAP S/4HANA® のテストが含まれていました。これは、移行プロジェクトにテストの自動化を組み込んでいない組織は、その時点ですでに他組織から後れを取っているということを意味します。

自動化の導入プロセスに詳しくない組織は導入をためらいがちですが、Entenza はこれを大きな過ちだとし、次のように述べます。「適切なツールセットを適切なタイミングで導入することは常に重要ですが、IT 部門が複数の稼働部分を扱わなければならない状況においては、これは必須の条件となります。Ansible は設定なしですぐに使い始めることができるので、自動化に詳しくない組織も Red Hat のエンジニアがサポートする組み込みの自動化アセットを使ってデプロイにかかる時間を短縮できます。」

Ansible Automation Platform のような自動化ソリューションを使うことで、組織は IT 環境をモダナイズし、現在のニーズに基づいてプロセスを単純化できるだけでなく、自動化そのものを継続的に単純化して将来的なスケーリングと適応に備えることができます。Red Hat の言い分を丸呑みにする必要はありません。Red Hat Ansible Automation Platform では 60 日間の無料トライアルが利用できます。ぜひ登録して、自動化のメリットをご自分の目でお確かめください。 ■